

# 連なる峰々

ニセコのパウダースノーを満喫する



三和 史朗

## はじめに

ニセコ連峰。連峰とは文字どおり連なる峰（みね）である。ニセコ連峰を眺めるなら蘭越に限る。強くそう思うのは、黒松内から蘭越に向かう国道 5 号線を走る時だ。右手に、雄々しい独立峰の羊蹄山が鎮座し、そこから西に向かいそれぞれ独特な山容をもった山がつながる。

ニセコアンヌプリ

イワオヌプリ

ニトヌプリ

チセヌプリ

シャクナゲ岳

白樺山

前目国内（まえめくくない）岳

目国内（めくくない）岳

雷電山

蘭越市街からは、それとはっきり見えないが、他にもワイスホルンや岩内岳もニセコ連峰の山である。山の名前の多くは当然ながらアイヌ語に由来するが、その詳しい解説は他のガイドブックにゆずることにして、この本では蘭越在住者として、ニセコ連峰の冬の醍醐味ともいえる、バックカントリースキー（以後 BC スキー）について紹介したい。

## バックカントリーとは

そもそも BC スキーとは、スキー場のようなリフトやコースが整備された人工的な環境では無く、自然の本来の状態が保たれた山に登り、その斜面を滑る行為である。ニセコでは独自のルールを設定し、スキー場内から場外へ出て行くゲートが設置されている。そこから登って、自然の地形を滑ることもできるが、近年それは「サイドカントリー」と言われるようになってきている。

つまり、別な言い方をすれば、自分の足で歩き始めるものを BC と言い、何らかの人工的手段(リフトや雪上車、スノーモービル等)で高度をあげ、そこから滑ったり、ちょっとだけ登って長く滑ったりするのはサイドカントリーと見なすことができる。

言葉の定義や、厳密な線引きをしようとしても、いろいろなケースや装備、滑走者の価値観もあるので一概には言えないが、要はこれから紹介するのは、BC であるということだ。

また、BC はそうした「滑るために歩いて登る」という概念にもとづくものであるから、滑走につかう用具がスノーボードになれば、BC スノーボードになるわけで、私自身が近年スキーを中心に使用しているという理由で「バックカントリースキー」と表現しているだけのことである。



イワオスプリの下部樹林帯を登る

## 原風景

私が BC を始めたのは、山好きだった父に連れられて登った音江山がきっかけである。当時、多くの子がそうであったように、近くのスキー場で朝から晩まで滑っていて、年に数回あるバッチ検定に臨む。そんなシーズンを繰り返していた。当時は 3 級までは苦勞すること無く合格するが、2 級が小学生にとっての鬼門であり、なかなか合格しなかった。小学 5 年のころだったと思うが、私は 2 級の検定を 3 回受験して 3 回とも不合格になってしまったのである。どうにも基礎スキーに対するモチベーションが持てないでいた時に、父が私を山に誘ってくれたのである。

滝川に住んでいて、深川の音江山登山口までは 1 時間とかからない。今でこそ音江山は北空知では人気の BC スポットになっているが、当時はまったく人影のない静かな山だった。国鉄で機関士をやっていた父は、勤務が不規則で、「時間ができたら音江山」のような感じだったと思う。除雪終点の民家の方とも仲良くなっていたようだし、車にスキーを積んでは「ちょっと登ってくる」という生活をしていたように記憶している。

スキー靴とスキーウェアという装備で、訳も分からず、山の頂上目指して父の後ろをついて行った。音江山は急な斜面があるわけでも無く、当時のルートは尾根をたどるもので、スキーの滑降自体がすばらしく楽しいものでは無かった。しかし、リフトも人もない静かな山の中を登って滑る感覚は、いままで 3 級だ 2 級だとやっきになっていた自分がどうでもよくなるような衝撃だったのだと思う。

それ以来、私はすっかり BC の魅力に取り憑かれてしまった。ゲレンデなんてどうでもよくなってしまったのである。

## ニセコフリークへの道程

大学に進学し、中学高校と続けてきたサッカー部に入部したが、この時もあの時と同様の感覚に襲われた。大会に追われ、練習だレギュラーだと、今までの 6 年間と同様の 4 年間を過ごすのかと思うと、なんだかモチベーションが弱まってしまったのである。

父を追い越そうと思う息子心から、私は大学のワンダーフォーゲル部の門をたたいた。一から登山を学び、父を登山として越える。そこに光を見いだしたのである。

夏のニセコ連峰を岩内岳から五色温泉まで縦走した。二泊三日の行程である。見事な眺望。変化に富んだコース。そして温泉の豊富なこと。その頃からニセコ連峰の魅力を感じ始めた。大学 3 年の春には朝日温泉から雷電山を経由し、また五色温泉まで縦走した。残雪たおやかな稜線は、春山の醍醐味である。

冬はチセヌプリスキー場からチセヌプリに登った。当時、冬の五色温泉は通行止めで、五色温泉に行くにはモイワスキー場の山頂から雪上車で運ばれて行くしかなかったのである。五色温泉の向かいに旧国鉄保養施設である「山の家」があり、そこに宿泊した記憶もある。

こうして、少しずつニセコの冬の魅力を知り始めた 20 代。社会人になり、就職で離ればなれになった山の仲間達と、年に一回の年

越し山行を行いだした。これも父がやっていた企画から独立した形になるのだが、年越しは民間に就職した仲間も確実に帰省で集まる事が出来るメリットがある。しかし、冬のシーズンとしては時期的にまだはやく、雪が足りないこともあるのが難点だった。山小屋が利用できる快適な登山をあちこちと重ねていくうちに、チセヌプリが一番確実であるという結論に達したのが 20 代の終わり頃であった。

こうして、ニセコの山の魅力を確たるものにしていったのだが、勤務は北後志から小樽になり、札幌に住んでからと言うもの、年に数回しか来られない日々が続いた。

そして 41 才の春、蘭越に転勤となり、バラ色のパウダーライフが幕を開けたのである。



蘭越は米の町。目の前に広がる黄金色の稲穂の向こうに、ニセコ連峰が東西にのびる。

## おすすめルート①（五色温泉起点）

五色温泉は標高が750mあり、自動車で通年アプローチできる最高地点である。ゆえに、シーズンインも早く、スキー場がオープンする前から雪の感触を楽しむことができるので、私の一番のお気に入りエリアだ。

朝早く家を出て、ちょっとだけ登って、雪のついた斜面を2ターンして帰ってくる。そんなシーズン初めをするようになった。



奥がイワオヌブリで手前の斜面を滑る。

写真は2013/11/17のもの



たった数ターンだが、シーズンインを実感するには十分である。

## イワオヌプリ

駐車場から至近ということもあり、最も人気のある山である。除雪終点から道路を進み、看板が見えたところで道路から外れる。少々樹林の濃い尾根を登り、麓につくと見上げる斜面、どこでも滑ることが出来る。

最も人が入るのは通称「ボウル」といわれているすり鉢状地形である。西からの風で飛ばされた雪がたまり、早い時期から粉雪のコンディションが整うからである。



イワオヌプリの一般的なルート（矢印）と「ボウル」と言われる地形（囲み）

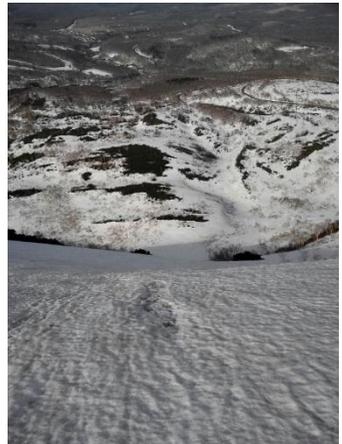
（アンヌプリの西尾根から撮影）

北東側にはとても急なシュートがあり、雪が安定している時にしか滑ることができないところもある。私は雪崩が恐ろしいので、春の残雪の時に滑っている。

写真

右上：北東面

右下：滑る斜面を上から見下ろす



左下：春の駐車場はゲートの所まで行ける。北東面は冬に滑ると五色温泉まで戻ってくるのが大変だが、春はアスファルトの上を歩いてこられるので楽だ。

## アンヌプリ

駐車場から北東側に西斜面が見える。緩い沢型が二本あり、そこを詰めて滑るだけでも十分楽しい。シーズン初めと春の時期におすすめである。



さて、アンヌプリ頂上からスキー場側は今や大変な賑わいとなっている。アンヌプリスキー場の 2 番ゲートとひらふスキー場の 3 番ゲートが開いた時は、スキー・スノーボードを担いだ人が、山頂を目指してわんさかと登ってくる。彼らのお目当ては、藤原の沢や東尾根が中心だ。スキー場エリア外で手つかずの新雪を楽しめて、花園スキー場に戻ってくることが出来るとあり、かなりの人が入っている。

アンヌプリの北斜面もゆるい沢状地形で雪がたまりやすく、狙い目となっている。しかし、花園スキー場に戻るためには北斜面の半

分程度で東尾根の方に戻らなくてはいけない。しかし、北斜面は下半分が楽しい。山頂が悪天でも下部は雲の下で視界が開けることも多く、雪質も安定している。

下、残り三分の一を残して西側に戻ると、歩き返すこと無く五色温泉に戻ることも出来るので、メンバーや時間に合わせて計画すると良い。

一番おすすめなのは、五色温泉からアンヌプリ北斜面を下まで滑り、イワオヌプリを登って、五色温泉の方に滑るルートである。朝7時頃に登山を開始すると、私は大体昼前に五色温泉に戻ってきている。



西尾根上部は強風により、スキーを履いたまま登るのは難しい。



山頂付近は強風が吹き荒れて、視界が悪いことが多い。



イワオヌプリ北東面から見るアンヌプリ北斜面。標高差 500mの斜面は圧巻だ。奥に羊蹄山も見える。

## おすすめルート②（湯本温泉起点）

### チセヌプリ

冒頭にも書いたとおり、私はかねてよりチセヌプリが大好きであった。チセヌプリスキー場も、他のニセコのスキー場と違って圧雪斜面が少なく、自由に樹林の中を滑ることができる D コースなどはお気に入りだった。

しかし、平成 24 年度をもって、チセヌプリスキー場は営業を休止している。2013-14 シーズンは、純粹に BC を楽しむ人が駐車場からスキー場を登ってアプローチしている。

スキー場のコースも全く圧雪していないので、コースを上ってコースを滑る人も多いようだ。BC のトレーニングとしてはむしろ最適な場所かもしれない。

ただ、この駐車場はスキー場が営業しなくなった関係で、国民宿舎雪秩父の第 2 駐車場としての扱いになっているようである。つまり BC に来た人たちのために除雪しているのではないということ踏まえておきたい。

さて、何回登ったことかわからないチセヌプリだが、私自身の結論としては南東面の緩い沢型が一番好きである。ここもイワオヌプリのボウル同様西からの風で雪が吹き溜まるので、登る南面がカリカリでも南東面は雪が軟らかいことが多い。標高差も 400m あり、スキー場を登ってでも頂上に立ち、一気に滑り降りたいものである。

ニセコの山はどこもそうだが、山頂付近は樹林が無く、強風になることが多い。故に視界も悪いので、チセヌプリでは降り口を間違えないように気をつけたい。



スキー場の奥の台地に出たところ。  
野ウサギの足跡が新しい。



山頂の標識は、風雪にさらされて、  
雪が張り付いている。



南東面を見上げる。上の斜面も良いが、疎林の中の下の斜面も良い。

南東面を道路まで降りきると、少しだけ除雪されていない道路を歩く。この歩きを嫌い、南東面の途中から逃げるように南側にルートをとったりもしたが、木が少し濃いのと、おもしろさが半減するので、結局道路まで降りることにしている。



12月末の様子



3月中旬(年によって変わる)

そして、この看板を見るたびに、積雪の状況がわかる。看板が埋まっても、その場所がわかるように棒をつけているが、これは夏もついているので、ドライブに来た時は注意して見てほしい。どうして看板に棒をつけているのかというと、看板が埋まるほど雪がつもるからなのである。

時間に余裕があり、天候が穏やかな時は、チセヌプリの東面もおすすめである。ニトヌプリとのコルに向かって一気に降りる大斜面は、ものすごい開放感である。

ただ、東面には大きな雪庇が出来るので、先ほど触れたように視界が悪い時はその雪庇を踏み抜かないように十分注意したい。

ニトヌプリを途中まで登って南西面を下ると、チセヌプリの南東面を下った時と同じ道路に出てくる。このニトヌプリの南西面は樹林の中で雪も良く、奥なので人があまり入ってこないというメリッ

トもある。

道路からは、屈曲点より雪秩父に向かって降りる尾根をたどる。12月の早い時期だと、川が埋まっていなくて徒渉しなくてはいけないこともあるので、最後の下りは慎重に。



川が埋まっていない時は、一度スキーを脱いだ方が無難。

## おわりに

冬山の魅力に取り憑かれて30年。BCの道具も技術も大きく進歩し、同時に愛好者も増えている。しかし、遭難事故も増えてきているのは確かだ。

上級者の滑る動画や写真を見て、私も憧れるが、事故だけは起こさないように気をつけている。慎重になるということは自分の命を守ることでもあると思う。

山は逃げない。雪もまた来年降る。

いつものルートを楽しみながら、また新しいおすすめルートがきたら増補していきたいと思う。

連なる峰々～ニセコのパウダースキーを満喫する～

2014年3月1日 発行

著 者 三和 史朗

発行者 三和 史朗

出 版 らんこし作家デビュー・プロジェクト

© Shiro Miwa 2014